1983・12・16

東京

（第3種郵便物認可）

新刊紹介

川柳のたのしみ

林　富士馬著

「川柳漫歩」の題で、五十六年六月から二年間、本紙夕刊に連載した中から三百六十五句を選び、歳時記風に月別に仕立ててある。

著者は文芸評論家で「自身の文学に対する態度を、川柳という文学形式を通りながら、あきらかにして行くよろこびを感じた」と後記しているが、俳句や詩など他のジャンルを意識した目配りが、内容を豊かにしている。ことに俳句については「嫁とりは　女ばかりで埒をあけ　芭蕉」の句で「私の『川柳のたのしみ』は、つまるところ私の芭蕉論」と述べているように、その本質は俳諧であり川柳と同根であることを繰り返し説いている。

（平凡社・一二〇〇円）

椎の木学校

宇佐美　承著

「窓ぎわのトットちゃん」で有名になった自由教育のトモエ学園には原型があった。大正十三年、日本のペスタロッチといわれた野口援太郎の池袋の私邸に設立された「児童の村小学校」がそれである。児童たちは何の強制も束縛も受けず、したい放題、勝手気ままに暮らすなかから、次第に彼ら自身の個性的な能力を発見していった。このユニークな学校の生い立ちから閉校までを独特のメルヘンタッチで描いている。

（新潮社・九五〇円）

『きのこ』の自然誌

小川　真著

きのこの形、成長、毒、胞子、菌糸・菌根、分布、生態などと並べると学問そのものといった感じがするが、三十数話がじつにわかりやすく面白い。

古びた社殿わきの丸太から生えたキクラゲ「ユダの耳」、ドクツルタケ、タマゴテングタケによる「きのこ殺人事件」、味覚を競う東のマツタケ、西のトリフはどちらが早く人工栽培に成功するかなど。きのこ博士といわれる著者がうんちくを傾けた好著である。

（築地書館・一八〇〇円）

ねむり姫

渋沢　龍彦著

表題作をはじめ、時間と空間を自在に操って飛び交う渋沢氏異の物語八編を収めている。

「ねむり姫」は後白河法皇のころの話で、京の中納言の娘・珠名姫の数奇な運命を描く。生まれて間もなく母に死なれた薄幸の姫は、十四歳の年に深い眠りに落ちたまま生きつづける。姫の異母兄のつむじ丸は、乱行の末に盗賊となり、やがて教祖になるが、因縁に結ばれたこの二人の五十年を超える物語は、不可思議な世界をくりひろげてみせることである。（河出書房新社・一二〇〇円）

読書

角浩・画

日本の美と文化⑫　城と天下人

桃山の黄金文化

大航海時代の十六世紀、ポルトガル、スペインの南蛮船が来航し、異国風物をとり入れた華麗な桃山文化が花開いた。

南蛮鉄やそのファッションは天下人のいる城の装飾や武具まで一変させた。フランシスコ・ザビエルら宣教師はキリスト教とともに天文・地理学の知識を伝え〝世界の中の日本〟という認識も芽生えた。

ルイス・フロイスは、天主堂三百、信徒十五万と報告しているが、礼拝用のイコン（聖画）や祭具も盛んに作られ、逆輸出された。高山右近の旧領から発見された写真の「マリア十五玄義図」は単なる模写ではなく、中央に聖母、下に聖者二人、周囲にキリストの生涯を描いた独創的な作品。ほかに蒔絵（まきえ）、飾画、襲略や技術などをカラー資料と解説で紹介。

（講談社・二四〇〇円）

鄧小平新時代

浅川　健次著

著者が本紙の北京特派員として中国に駐在した一九八〇年七月から八二年七月までの二年間は、鄧小平時代の開幕期に当たり、余命を保った華国鋒体制が急速に崩壊していった時期であった。

中国の将来にとって重要な歴史的意味をもつであろうこの時期の報道において、浅川特派員の筆はひときわ光彩を放つものであったが、今回の著書ではさらにつっこんで「生きた中国像」を描いている。とくに中国の庶民（老百姓）の感情や生活を、ある場合には「中国の官製の新聞報道」ではない「ナマの声」によって、ある場合には反体制派の地下出版物を通じて、また同じ新聞でも『人民日報』ではない『北京晩報』のような身近な問題の多い紙面によってとらえた社会派記者の目が随所に活きている。

この点が本書の第一の特徴であり、だから、「中央の方針の『放』（緩み）をかぎとった農民たちは、すぐに別の方向に突っ走り始める」という「農民たちの〝悪知恵〟」についても見逃さない。

第二の特徴は、「人工衛星を打ち上げ、潜水艦からミサイルを発射できるほど軍事科学が進んだ国で、国民が豆腐一丁を買うのに朝から行列を作らねばならない」という中国経済の偏りに切歯扼腕（せっしやくわん）しながらも、経済を中心に中国社会の「下半身」を見すえていることであろう。

著者の基本的な見方は、「毛沢東は精神主義の革命を目ざしたが、鄧（小平）氏は実用主義――中国を強大で現代化された国に変えるために

『庶民像』をとらえる

日本経済　いま　ひとたびの離陸

宮崎　勇著

「平和経済こそ、日本の生きる道」と、著者は日本経済の潜在成長力（生産性向上能力）を活かす方途を、この本全体を通じ一貫して主張している。著者の言葉は決して声高ではない。しかし、静かに語る言葉は読む側の胸のなかに深く突きささってくる。

成長という概念の意味内容をとらえ直した、良識あるエコノミストの発言といえる。

著者は太平洋戦争のさなか、ペンを銃に代えることを余儀なくされた学徒出陣の世代であり、多くの友を戦死させ、国民の塗炭の苦しみを代償として獲得した自由と民主主義を、日本の精神的財産として重視する。

軍縮の経済

この戦後民主主義の思想をふまえて、戦後の諸改革による「人間の自由化」が進み、市場原理の有効性が日本経済に働いたとして、軍縮の経済学を説いているところが、凡百の市場信仰の理論家と通う点だ。

一九七〇年代の世界経済において、日本が先進諸国に比べパーフォーマンスが良かった要因分析でも、日本的経営は、資本主義的な経済手法のみならず、いったんは否定した毛沢東の精神主義も、さらには〝覇権主義〟のソ連との和解も辞さないという徹底した実用主義へ転換したのである」という表現につくされている。

中国はまだ揺れ動くにしても、「少しずつ向上しながらラセン状に揺れていく――そうであって欲しい」という著者の気持ちは、中国の庶民の心に通じている。

（有斐閣選書・一二〇〇円）

東京外語大教授　中嶋　嶺雄

成長経済下、ふくらまなくな　なく、中心商業地がもってい　跡づけ、それがもたらした以　化、④商業以外の都市機能及

生活行動研究所所長　山口　貴久男

機「江田塾教育」（三〇〇円）ほか

読書『鄧小平時代』『庶民像』をとらえる　東京新聞-1983.12.16